



初詣

4月11日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

4月11日のおはなし「初詣」

えー、毎度たくさんのお運びをいただきまして誠にありがたいのでございます。いつものことながらおかしな話をせっせとお話しさせていただくのでございます。

年度が改まりまして、桜も満開、新入社員も入ってきて、連日きこしめしてるなんてお方もおられるんじゃないかと思えます。みなさまがたにおかれましては、調子のいい方はますます調子良く、そうでもないって方はちょいとばかし上向きになる、そんな年になりますよう心からお祈りいたします。

かく言うあたしも、ここんところどうも調子が悪くてすっかり引きこもりになっておりましたが、新しい年度は生まれ変わろうってんでね、どんどん表に出ていくことにしました。そいでもって何から何までいい年にしちまおう、厄払いだってんで、もう日付が変わってからずっと桜の下で飲み通しなんで。誰ですか。桜の下に引きこもってるんじゃないか、なんて言ってるのは。でもいいんです。どんなことが起きても「まあ、あれも酒の席でのできごとだから」なんて言えりゃあ、腹も立たないし笑い話にできるてえ勘定です。

あのう、酒飲みってのは面白いですな。花が咲いちゃ飲み、暑気払いに飲み、紅葉が綺麗だから飲み、雪見酒と称して飲む。正月なんざ、あれですよ。日付が変わっただけで飲む。花も暑気も紅葉も雪もなくても飲む。目出たい！なんて言いましてね。何も変わったことはないんですかね。変わったのは日めくりだけで。

考えてみれば不思議なものですな。初日の出だ、なんてやってますがね。別に昨日までと何が変わったわけじゃない。だいたいおんなしところからおんなしように日が昇る。お日様が普段の三倍くらいの早さで上がって来るとか、大きさが五倍くらいのお天道様が出て来るとか、景気付けに十も二十も太陽が出てくるなんてわけじゃあない。それだのにみんなして初日の出をありがたがる。わざわざ前の晩から苦労して山登りまでして、そいでもって拝んだりする。あれは何ですな、自分ちの窓から眺めてるんじゃ、大晦日の日の出とどこがどう違うかわかんなくなっちゃうから、いつもと違う日の出を演出しにってるんですな、察するに。

でもまあ気は心と言うんでしょうか、お正月の朝は、なんてんですかね、すがすがしい。せいせいしている。さえざえしている。笑う門には福来たるなんて申しますが、そうやって気分がすっきりしていると、いろんなことが楽しくなる。たいていのことなら腹も立たなくなる。あれは不思議ですな。

「おう、酒だ。酒をくれ」

「はいよ、おまいさん」

「なんだこの！ 朝っぱらから酒を飲んじゃダメだって亭主に説教する気……え？」

「だから、はいよ、おまいさんって言ってるじゃないのさ」

「酒をくれって言ったんだよ？」

「だから、はいよ、って」

「なんだよ説教しねえのかよ」

「説教なんてしませんよ」

「飲む前から酔っぱらってんのに？」

「いいじゃないの」

「まだお日（し）様上がったばかりなのに？」

「正月だよ。朝っぱらから飲もうじゃないのさ、あたしもお相伴にあずかりますよ」

「お？ おう。そうか。そうか正月か」

お酒ってのはこわいもんですな。飲んだくれの亭主は今日がいつかなんてすっかり忘れていらしい。女房に今日は正月だって言われて目を白黒させている。

「やだねえ、お正月をお忘れかい」

「いや、忘れちゃあいねえさ。あれだろ？ 大晦日の明くる日にこういきなり新年でございと」

「そうそう」

「誰が決めたか目出たい日ってことで、年にいっぺんか二へん巡って来る……」

「おほほほ。おかしなこと言うわねえ。正月が年に二へんも巡ってくるもんですか」

「今日がその正月だってのか」

「あらおかしなことを言うじゃないの。外に出てご覧なさい。門松だの、注連飾りだの」

「うちん中はどうなんでい。何にもねえじゃあねえか」

「玄関にはお餅を、表には松の枝を拾ってきてちゃあんと飾ってますよ」

「そうか」

「そうですよ。そりゃあ御節を用意する余裕はないけど、その分、やりくりしてこうして、ほら、お神酒も用意しましたよ」

「そうか！ そうかい？」

「さあ、いただきますよ。目出たい日なんだからさ」

「おう。飲むか」

年がら年中、酒を食らっては女房と言い争いばかり。そんな飲んだくれの男ですから、こう聞き分けのいい女房を前にすると調子が狂っちゃう。でもまあ酒には目のない男です。うまそうな樽酒の木の香りがぶんとするってえと、細かいことはどうでもよくなる。馬やなんかの落とし物に惹き付けられてく銀蠅よろしく、お神酒の香りの方につつい〜っと引き寄せられてしまう。

「さあ、おひとつどうぞ」

「おう。お酌をしてくれるのかい？ うん。おーととととと。じゃ、あれだ。おめえもひとつ」

「あら、おまいさんがかい？ あたしにかい？ 嬉しいねえ。じゃあいただくよ」

「ほらほらほら」

「ああもうあたしは一口あれば」

「あに言ってやんでえ、いつもお世話になってる女房様じゃあねえか。何はなくともお神酒は用意してくれておいらも嬉しいんだよ。ほら、じゃあ乾杯だ。何に乾杯する？」

「ばかねえ。お正月なんだからお正月らしく挨拶すりゃあいいじゃないのさ」

普段なら「ばかねえ」なんて言われようものならそれだけで猛り狂う男が、気分がいいもので、うんうん、なんて聞き流す。こういうのもお正月効果のひとつですな。

「じゃあ、あけまして」

「おめでとうさん」

「今年もあれだ、ひとつなにぶんに」

「よろしく願いいたします」

「おう。乾杯だ」

「いただきます」

「ングングング」

男が威勢良く飲む。

「うん、うん、うん」

女房もかわいく喉を鳴らす。

「プハーッ、こりゃ驚いたいい酒だね」

「うん、うん、うん」

「お、なんだおめえ、色っぺえ飲み方するじゃあねえか」

「やだよ。あたしはちょいとずつしか飲めないから」

「そうか、何だな。おまえたあ長い付き合いだが、こうして一緒に飲むこたあ、あんましなかったもんなあ」

「そうだねえ。あたしも嬉しいよ」

「ま、飲みねえ」

「あい」

なんて感じですっかり気分良く飲んで、あれこれ話を始める。小さいころの正月はどんなだったか。何をして遊んだか。喧嘩風で一等になったなんて男が自慢すれば、女房は曲芸みたいな独楽回しができたなんて知られざる過去をあかしたりする。雑煮には何を入れたか、初詣はどこへ行ったか、何をお祈りしたか。懐かしい話に花が咲いて、すっかりきこしめして、気分が良くなった夫婦は、ふたりして一緒に初詣に行こうなんて話になる。玄関先の餅を見て男は感心

する。うまいこと飾るもんだね。誰がどう見ても鏡餅だ。おまいの才覚にはほとほと感心する。がらっと戸を開けて男は目を細める。まぶしいねえ。何日ぶりだろう。

そんな調子でふらふらと表に出る。ふたりにてくづく歩いていく。鳥居をくぐって何やら賑わった境内に入る。なけなしのさい銭を放り込んでパンパンと拍手打ってお祈りして、そのうち男が気がつく。なんだ？ あんまり正月らしくないね。おや、門松がないじゃないか。そういや、うちにも門松がなかった。松の枝を拾ってきたって門松はどうした。何だ。どうして泣いている。いいんだよ、おまいさん。いいんだって何がいい？

「あたしは嬉しいんだよ。外には出ねえって言って家の中に引きこもりっぱなしになってたおまいさんが、こうしてあたしと一緒にここまで出てきてくれた。それだけであたしには新しい年が来たも同じだよ」

「何だ？ じゃああれか、今日が正月だってのは」

「ごめんなさいよう」

「嘘だったのか。ほんとだ。桜が咲いてら」

「堪忍しておくれ」

「堪忍も何も。おめえのおかげで出られなかった表にこうしてまた出て来られた。おう！」

「あい？」

「おめえの言う通りだ。今日がおいらの謹賀新年、めでてえ元旦だ。これからおいらは外に出るよ。仕事もする。それがおめえへのお年玉だ」

「おまいさん！」

「泣くなって」

「あたしの大好きなおまいさんが戻ってきた」

「ええ？」男は照れてしまう。「花見客がうるさくて聞こえねえや」

ひきこもり男奇跡の生還のお話でございます。

(「生還」 ordered by ハンサム-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

初詣

<http://p.booklog.jp/book/48023>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48023>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48023>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.